

鉄道総研の

技 術

遺

産

File No. 4

鉄道錦絵はこうして見る

■ 錦絵の世界

錦絵や浮世絵は、美術の授業で習った葛飾北斎や歌川広重などの名前とともに記憶されている方も多いと思いますが、その違いは意外と知られていません。どちらも木版画を基本としますが、肉筆によるものもあり、また描かれる対象も歌舞伎役者から風景に至るまで様々で、日本の誇る伝統美術として印象派の絵画にも影響を与えるなど、海外でも高く評価されています。これらは一般に錦絵と総称されますが、特に通俗的なものを浮世絵と称しました。浮世絵はまさに「浮世」の姿を写す鏡の役割を果たし、当時の世相や風俗・習慣を知るための貴重な歴史資料にもなっています。

錦絵は、「錦」とあるように多色刷りであることが大きな特徴でした。カラー写真などが無い時代に色彩をどう伝えるかは難問でしたが、錦絵は色ごとに複数の版木を用意して重ね刷りすることでこの課題を解決し、色彩豊かな独特の世界観を構築しました。また、版画を基本とすることによって大量印刷を可能とし、時代の流行や話題を時



①三代・歌川広重「横浜鉄道館蒸気車往返之図」（鉄道総合技術研究所図書室所蔵）

よって、現在の写真週刊誌のような役割も果たしていました。

錦絵は、明治時代の半ばになると写真を用いた絵葉書が登場したため、急速に廃れてしまいましたが、その伝統は「大正広重」と称された吉田初三郎（1884～1955）などの絵師に継承され、沿線名所案内として昭和時代の初期まで鉄道旅行の宣伝に寄与しました。

■ 横浜駅と蒸気車

明治維新とともに登場した鉄道は、錦絵にとって最先端の話題でした。日本に鉄道が敷設されたことは、当時の人々にとって東京スカイツリーが完成した以上の熱狂であったことは想像に難くありませんが、まだ新橋と横浜の間を結んでいただけなので、誰もがその姿に接したり、利用していた時代ではありませんでした。外国人などによって幕末から日本でも写真は撮影され始めていましたが、まだ一般的では無く、鉄道の姿をいち早く大衆に広める手段として、錦絵がさかんに発行されました。

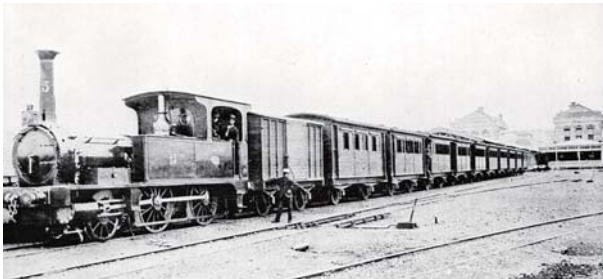
鉄道総研で保存されている「横浜鉄道館蒸気車往返之図」は三代・歌川広

重（1842～1894）が1873（明治6）年頃に描いたと推定され、開業間もない頃の横浜駅を、野毛山方面から俯瞰しています。港には外国船とおぼしき大型艦船を含めて多数の船舶が停泊し、手前の往来には人力車が走り始めています。「横浜鉄道館」は、横浜駅のごとで、現在の根岸線桜木町駅付近にありました。その「鉄道館」を右手にして、長大なプラットホームが描かれ、機関車を先頭に旅客列車が停車しています。機関車や客車は、車軸配置を含めて特徴をよく捉えています。錦絵特有のデフォルメなどもあり、必ずしも正確ではありません。

現物の寸法は、縦35cm×横72cmの横長ですが、よく見ると3分割されており、3枚の絵を貼り合わせて1枚の絵を構成していることがわかります。これは、版木の大きさと絵の大きさが制限されるため、3枚に分けて印刷し、これを連続させてより臨場感のある絵としているためで、三代・広重が多用した手法とされ、特に鉄道のような横長の構図が必要とされる題材では効果的に用いられました。現在の、パノラマ写真の元祖と言えます。



②初代横浜駅の正面



③鉄道開業時の旅客列車(新橋駅構内/岩崎・渡辺コレクション)

この錦絵で興味深い点は、側面に客車の等級を記している点で、機関車を先頭として、下等+下等+中等+上等+中等+下等+下等の7両編成で構成されています。当時の記録では、一般の旅客列車は、上等車1両、中等車2両、下等車5両で編成されていたと伝えられるので、上等車を中央に連結して両側を中等車で挟むという考え方を含め、ほぼ忠実に描かれていると判断されます。

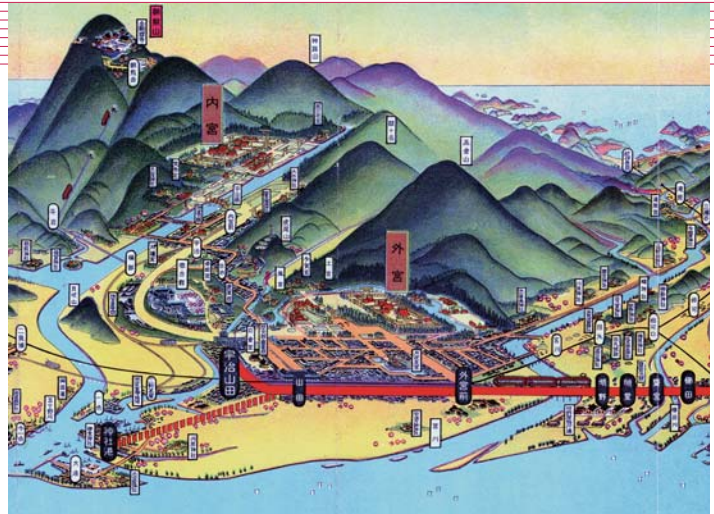
右側に描かれる初代の横浜駅は、アメリカ人建築家のリチャード・ブリジェンス(1819～1891)によって設計された木骨・石張りの建物で、新橋駅とほぼ同一設計でした。ただ、新橋駅はプラットホームを駅本屋の中心軸上に設けましたが、横浜駅は山側に寄せてアシンメトリーにプラットホームを配置し、車止めもこの位置には無かったと推定されるので、プラットホームなどは新橋駅での観察に基づいている可能性があります。背景には、外国船などが描かれていますが、このあたりはのちに新港埠頭が造成された場所で、

現在はランドマークタワーや商業施設、遊園地などになっています。

作者の三代・歌川広重は、「東海道五十三次」などで知られる初代・広重の門人で、明治維新とともに蒸気車や蒸気船、西洋館などの開花絵を得意とし、鉄道の錦絵を数多く残しました。特に、強烈な印象を与える赤を多用しましたが、これは文明開化の熱気を伝える役割を果たしたと解釈されており、青を基調とした初代・広重に対して「赤絵」などと呼ばれています。この作品も、空が赤く塗られているほか、衣服などに赤が効果的に使われており、作者の独特な色彩感覚を読み取ることができます。

■ 錦絵は時代を超えて

この錦絵は、かつて研究所の所長室に掲げられていたものと伝えられますが、なぜ研究所にあるのか、どこから入手したものか、誰が所有していたのかなど、詳しいことはわかりません。おそらく、鉄道創業時の志を思い起こすためのよりどころとして、



④沿線名所案内の例(吉田初三郎画「参宮急行電鉄沿線案内」部分)

代々の所長室に掲げられていたことが想像されます。最近、この錦絵とほぼ同角度で横浜駅構内を撮影した写真が、当時来日したオーストリア人写真師のミヒャエル・モーザー(1853～1912)の遺品から発見され、新聞(「朝日新聞」2012年1月29日付朝刊)でも報じられて話題となりました。



錦絵には、伝聞や想像だけで描かれたと思われる珍妙な鉄道もしばしば登場しますが、「横浜鉄道館蒸気車往返之図」では、実物を見ていなければ描けない車両のディテールもそれなりに表現されています。工学的な予備知識があったわけではないので、必ずしも客観的で正確な情報ではありませんが、錦絵を読み解くことによって、当時の鉄道の様子が理解されるだけでなく、人々の驚きや興味の対象がどこにあったのかを知ることができます。

(小野田滋/情報管理部 担当部長)

文献

- 1) 明治鉄道錦絵, 交通協力会, 1971
- 2) 文明開化と日本の鉄道, 三和テック, 1987
- 3) 奥田敦子: 広重, 太田記念美術館, 2007